

きずなと努力でつかんだ 最優秀賞

さて、ここで少し時計の針を戻そう。名谷が全国大会を目指し挑んだ第52回西部地区高校演劇祭が開かれたあの日に。

同演劇祭は、昨年の6月25日、26日の2日間、西部地区の高校8校が参加し開催された。日野高校演劇部は、大会一日目に上演することとなった。

彼女が苦勞の末、作り上げた作品は「飛べ、鳥野高校演劇部」。ある女の子が部員数0人の演劇部に入部し、全国大会を目指す物語



▲県大会への切符を手にし、喜びに沸く演劇部

今年1月、名谷本人に3年間を振り返って話を聞くことができた。8年ぶりの県大会出場を果たした演劇部の快進撃は、惜しくも中国大会への切符を逃し止まってしまうたそうだった。しかし、彼女にはやりきった達成感と充実感で満たされていた。「仮に全国大会への切符を手にしても、私たちは出られないんです。でも、私たち

だ。幾多の苦難を涙あり、笑いありで乗り切っていく様は、等身大の彼女を映し出しているようである。

自信はあつたが不安と隣り合わせだった彼女に届いた結果は、最優秀賞。県大会に出場できる3校のうちの一つに選ばれたのだ。達成感とともに流した涙には、仲間と共につかんだ喜びと新しくできた地域とのきずなが刻まれていた。

自分で作った壁なんて簡単に乗り越えられる。積極的に地域へ出かけてほしい

の思いをつなげたかった」。そう話す彼女に、後輩や将来、日野高校を目指す中学生に伝えたいことはないかと聞いてみた。

“地域のひととの間に壁を作ってほしくない。色々な経験をして人間性を磨いてほしい”

彼女は続けて、「高校生は地域の人に嫌われていると勝手に思い込んでいたけど、そうじゃなかった。いつも私たちが優しく見守ってくれている。だから、もっと積極的に話しかけてほしい」とメッセージを送った。

以前、日野高校の授業（フィールドワーク）で地域の協力者に話を聞く機会があったが、町の人も高校生などどう接していいかわからないという意見も少なくなかった。

誰にでも先入観はあるだろう。そこで線を引いてしまえば、それはやがて大きな壁になってしまう。しかし、それは自分で勝手に引いた線だ。どちらかが一歩を踏み出すことで簡単に乗り越えられる。そのことに彼女は身をもってたどり着いたのだ。



▲江府町の企業と共同開発した商品や町特産品を米子しんまち天満屋でPR。こうした地域での活動が生徒の成長につながっている

無駄なことなんてない人となることが自分で自信を持つてほしい

3年間でさまざまなことを経験し成長した名谷。彼女が地域とのつながりの中で得たものとは何だったのだろうか。

彼女は、「人とのつながりで自分に自信を持てたこと。信じれば報われるし、無駄なことなんて一つもないって気付いた」「嫌な事だつて必要で、それが結果につながっている。これからも自分の選択を信じて進んでいきたい」と笑顔を見せる。松本さんや佐野さん、さまざまな地域の人と出会う中で、普通の高校生活では決してできない経

験をしてきたのだ。

そんな彼女は卒業後、演劇の道を目指し、上京する予定だ。「名谷にはその道しかないよ」と仲間や家族に背中を押されての選択だ。高校や地域で学んだことを自信に変えて彼女は今春、旅立ちの時を迎える。

“地域で人を育てる”

日野高校だからできること

“人間にとつて最大の贅沢とは、人間関係における贅沢のことである”（サン||テグジュペリ）

人とのつながりや縁が、やがて大切な人間関係をつくり、自分を支えてくれる大きな財産となっていく。これから社会に出かけていく彼女らに

とって、自分で学び考える力
は必要で、それを教え与えて
くれるのがまさに地域なのだ。
そして、鳥取県西部の中山間
地域にある唯一の高校である
日野高校を、地域・高校・行
政が手を取り合い、輝ける場
にしていきたいことが私たちに与
えられた使命かもしれない。

**地域にも少しずつ変化が。
坂をのぼった先には
明るい未来が待っている**

『教育』は、学校の中だ
けで行うものではないですよ
ね。家族や地域の皆さんの力
が絶対に必要。生徒は地域の
皆さんから学び、一緒に考え
最後には、自ら羽ばたいてい
かなければなりません。その
ための力と勇気を生徒に授
けてあげてください。地域
で人を育てる。ことについて、
片平コーディネーターは、以
前そう話していた。高校の魅
力化を目指し、コーディネー
ターが誕生して、まもなく3
年。少しずつだが、地域も生
徒も変わりつつある。

日野高校農業コースの実
習でできたおからや野菜など
を使って新たな特産品を作ろ
うと、日野郡内の企業が協力
し商品開発を続けている。す

でにエゴマ味噌や豆腐ドーナ
ツなどの商品が開発され、日
野高シヨップや町内外のイベ
ントなどで好評を得ている。
今後は、商品開発のアイデア
を生徒が自発的に行っていけ
るよう計画中大という。

2年次に行く職場体験も
その一つ。来年度から生徒を
受け入れる日野郡内の企業
や団体などの数を増やす予
定だ。米子市内からの通学
者にも地域とかわつても
らい、より地域に根ざした
教育や郡内への就職につな
げることがそのねらいだ。

少子高齢化や人口減少が進
む中、地域には次世代を担う
人材の育成、高校も地域連携
を生かす体制づくりなど、さ
まざまな課題が山積みだ。一
見すると、地域や日野高校の
未来は下り坂に見えるかもし
れない。しかし、地域資源や
人材を生かした今の歩みを止
めなければ、いつか振り返っ
た時、それは上り坂だったと
気付く時がきつとくるはずだ。

**いま、時代が求める人材と
は？ 地域・高校・行政が手
を取り合う時が来ている**

2020年からセンター試
験が廃止されることを知って

いるだろうか。文部科学省
主導の大学入試改革により、
現在のセンター試験が廃止
され、「大学入試希望者評価
テスト(仮称)」がスタート。
従来の知識重視の試験から、
思考力・判断力・表現力を
問う試験に変わるといふ。卒
業後の進路として、就業が
多く占める日野高校にとって
も、関係のない話というわけ
ではない。思考力や判断力、
表現力を備えた人材を社会
が求める時代を迎えているの
だ。だからこそ、日野高校が育
てたい「自ら学び考える」人
材と同じといえるだろう。

だからこそ、今回の取材
を通し、今の歩みを止めて
はならないと確信した。高
校は「人とかわかる力」を
持った人材の育成、地域に
は若い人にまちを元気にし
てもらいたいという思い、
そして、行政は地域と高校
の連携によるまちの活性化
を期待している。それぞれ
求めるものが違っても、子
どもたちの未来や高校の魅
力化に向かって、共に手を
取り合い歩み続けていくこ
とが重要だ。それが、いつ
か大きな花を咲かせると信
じて―。

